

万葉の夢、古今の夢

——俗信の夢のゆくえ——

菊川 恵 三

一 はじめに

「古代文学と夢」、このテーマが魅力的なのは、現代とは異なる古代の特殊な夢のありようへの驚きとともに、現代の我々にとつても夢の神秘性が失われてはいないからだろう。多くの論考が重ねられてきたのもそれゆえだが、なかでも最も印象的なものとして西郷信綱『古代人と夢』（平凡社、一九七二）を挙げることができよう。聖徳太子と夢殿、岩窟と長谷寺の観音信仰など、意外なつながりが明らかにされ、気がつけば夢が古代人の根源的なものに通底していることを知る。

その後も夢に関する論著は多いが、最も新しいものに河東仁『日本の夢信仰 宗教学から見た日本の精神史』（玉川大学出版部、二〇〇二）がある。これは副題に示すように、

宗教学の視点から、夢の機能・意味とその変容の過程を明らかにしようとする。多数の用例を丹念に検討する態度には共感でき、殊に古代から中世への仏教信仰と世俗の関連を分析し、並べなおしたものを、精神史とすることに違和感をおぼえずにはいられない。残された資料は少ないというだけでなく、大きな偏りがあってそれぞれに異質なのである。

例えば、河東論に限らず、夢の問題として和歌が採り上げられるとき、和歌表現としての特殊性に十分な配慮がなされていないように思う。後述のように、万葉・古今の夢は相聞歌・恋歌に集中する。したがって、和歌の夢を考える時には、相聞歌・恋歌として夢がどのように機能しているかを考える必要があるはずだ。しかしそのような視点を

踏まえた論はすくない。^① その結果、和歌の夢が物語・説話・日記と並列的に並べられ、問題の本質は見えなくなっているのではないか。^②

もつともそれは和歌の側についてもいえる。万葉から古今・新古今へと和歌史を追いながら、夢歌の変遷を論じることがは少なくない。^③ しかし、それが同時代の物語や日記とどのような関係になるのかを問題にすることはあまりなかった。^④

以上のようなことを念頭に、本稿では万葉から古今への夢歌の変遷とその意義に焦点を当てて考えてみよう。夢が万葉相聞歌の中でどのように機能し、それが古今の恋歌へどのように変化したかを考えることで、和歌の問題として夢をとらえておきたいのだ。和歌と散文の違いはこのような作業の向こうに見えてくるだろう。

その際、注目したいのは、万葉に特徴的だった「夢に現われるのは相手が自分を思ってくれるから」という発想^⑤（以下「夢の俗信」あるいは「俗信の夢」）が、古今以降急速に見られなくなることである。この原因については、夢信仰の衰退として説明されることが多い。先の河東論もそうだが、最近の久富木原玲「夢歌の位相——小野小町以前・以後」（『万葉への文学史 万葉からの文学史』笠間書院、二〇〇二）も、次のようにいう。

以上のように『万葉集』における夢路は夢見の呪術・技法に依拠するかたちで詠まれるが、『古今集』になると、こうした表現・発想は希薄になり、あるいは消滅する。そして、逆に夢路を通じていくその臨場性を具体的に表現するところに特色が出てくる。しかし、『後撰集』以降の勅撰集になると、このような古今的な特色もまた姿を消す。これは八代集の恋部に占める夢路の割合が低くなっていくのと呼応するもので、夢は呪的な魂の回路だという意識が急速に失われていく状況を映し出しているのだと考えられる。（傍線：菊川）

一方、片桐洋一（『歌枕歌ことば辞典 増訂版』笠間書院、一九九九 旧版も同じ）は「夢路」について次のように述べる。
「夢路」という歌語が古今・後撰集で数多くよまれるが、それ以降急減しているのを指摘して「夢」に託する人々の信仰やイメージの変化もさることながら、歌に託する人々の抒情のあり方が変わってしまった。観念的に、しかしみごとに美しく作りあげられた夢のある言葉をモザイクのようにまとめあげる歌のよみ方から、結果としての景と気を求める歌のよみ方に変わってしまったせいと見ることができるのである。

辞書の項目なので十分に論じられていないし、直接的には「夢路」をめぐる三代集とそれ以降の和歌に関する発言ではある。しかし傍線部のように、信仰の変化以上に「抒情のあり方」の変化だとするのは、この問題に一つの視点を与えてくれる。⁶⁾

確かに夢信仰の退化という側面はあるだろう。しかし、歌の中味を掘り下げてみると異なった側面が見えてくる。

例えば、万葉には「俗信の夢」とは正反対に、「自分自身の思いから夢をみる」という歌もある。信仰の問題とするならば、全く矛盾するといわざるをえない。しかも坂上郎女にいたっては、両方の発想の歌があるのである。しかし、実は歌の表現としてみた場合、ともに恋心を表す表現として成り立っている。⁷⁾ どうやら、万葉においてすでに信仰と歌表現は齟齬をきたしているのである。

二 万葉の夢歌

万葉では「夢」の仮名書例がすべて「イメ」となっていることから、夢は「寝(い) + 目(め)」すなわち寝ているときに見るものだと、語源的には押さえることができよう。また、ほとんどの用例が「夢を見る」ではなく、「夢に見ゆ(る)」となっていることから、夢が他者にもたらされるものという意識があったともいわれる。⁸⁾

また、巻(部立)別・作者別に夢歌を分類し、その特徴を指摘する論考も多い。いま、それを古今集と合わせて示せば次のようになる。

〔万葉〕

○巻四：21、巻十一：19、巻十二：25、巻十五：6、
巻十七：7、その他：27、合計99

○家持：16、坂上郎女：3、笠女郎：2、遣新羅使人
歌：4、中臣宅守：2、作者未詳：約50

〔古今〕

○恋：27、哀傷：3、雑：3、その他：2、合計35

○小町：5、業平：3、貫之：4、忠岑：2、敏行：

2、その他：7 読み人知らず：11

このように、万葉では巻四・十一・十二の相聞歌巻に、古今の場合も恋部に集中しており、夢は何より相聞歌・恋歌の重要なモチーフであることがわかる。ただし万葉の場合、相聞といっても巻二相聞部になく、家持ら天平期の相聞歌が多く収められた巻四に多い。また同じ相聞歌巻でも巻十四東歌には一例しか見られないという特徴も看過できない。

作者については、万葉の場合、家持と彼の周辺の女性たちに集中し、それ以外は遣新羅使人に多いなど偏りがみられる。一方、古今では小町の五首が最多だが、同時期の業

平、貫之・忠岑など撰者時代も多く、偏りはみられない。どうやら万葉の夢歌は、家持や後期万葉の都歌の問題と切り離しては考えられないようだ。

さて次に歌表現に目を移すと、そこに特徴的な一面が指摘できる。それは類句・類歌の多さであるが、なかでも「夢に見えこそ」と夢の逢いを積極的に願うものと、「夢に見えつつ」と夢の出会いをうたうものが多いことである。この二つとそれに関連した表現をあわせると実に万葉夢歌の半数以上を占める。その意味ではこの表現は、万葉夢歌の中核なのである。また、「夢の俗信」の根拠とされる歌もこれらに多い。それぞれをもう少し詳しく見てゆこう。

○「夢に（過ぎて）見えこそ」

現には言も絶えたり夢にだに過ぎて見えこそ直に逢ふ
までに
(12・二九五九)

現には逢ふよしもなしぬばたまの夜の夢にを過ぎて見
えこそ
(5・八〇七・旅人)

うつせみの人目繁くはぬばたまの夜の夢にを過ぎて見
えこそ
(12・三二〇八・問答)

我が心ともしみ思ふ新たな夜の一夜も落ちず夢に見えこ
そ
(12・二八四二・人麻呂歌集)

これらの歌はいずれも、現実には逢えない状況を認めつつ、

せめて夢に出てきて欲しいと相手に訴える。私を思えば夢に見えるはずという、「夢の俗信」を確信すればこそその表現ということができよう。また、波線・点線・実線で示したように類句を共有して多くの類歌を形成しており、当時広く認知された表現であることがみてとれる。

ところで、この「夢に見えこそ」の表現は巻十一・十二・十三に多く（それぞれ5・11・4例）、この三巻の夢歌の半数近く（五〇首中二〇首）がこの表現で占められていることに注意したい。というのも、同じ相聞歌でも家持を中心とした実際の贈答を多く収めた巻四には、僅か一例しかない（二一首中一首）からだ。これは次の「夢にし見ゆる」の場合と好対照なのである。

○「夢にし見ゆる」

疑問を含む

真野の浦の淀の継ぎ橋心ゆも思へ^{〔ア〕}妹が夢にし見ゆ
る
(4・四九〇・吹茨刀自)

間なく恋ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆ
る
(4・六二一・佐伯東人妻)

ここだくに思ひけめ^{〔カ〕}もしきたへの枕片去る夢に見
え来し
(4・六三三・娘子)

因果でとらえる

朝髪の思ひ乱れてかくばかりなねが恋ふれぞ夢に見
えける (4・七二四・坂上郎女)

葦垣の外にも君が寄り立たし恋ひけれこそば夢に見
えけれ (17・三九七七・家持)

「夢にし見ゆる」は相手の姿を夢に見た喜びをうたつて
いるようだが、決してそうではない。実はこの「夢にし見
ゆる」のほとんどは、傍線を施したように相手の自分への
思いと関連させてうたわれる。すなわち、「あなたが夢に
見えたのは、あなたが私を思ってくれるからだろうか」と
疑問を含む場合、「あなたが私を思ってくれるからこそ見
えたのだ」と因果でとらえる場合の違いはあるが、いずれ
も夢に見えたことと相手の思いのかかわりが問題にされる
のである。

したがって、この歌が実際の贈答歌として贈られると、
相手の思ひを受け止めて、だから夢に見えたのだと答えた
り(六三三・三九七七)、夢の原因を問いかけることによ
り相手の反応をうかがう表現(六二一)になる。つまり
「夢に見えこそ」が単刀直入な訴えであるのに対して、こ
れは相手に応じたふくらみのある表現になっていることが
わかる。そして実際、この歌が多用されるのは巻四・十七
(6・3)などの実際の贈答歌であつて、巻十一・十二
(2・2)には少ないのだ。

どうやら、「夢に見えこそ」は直接的な訴え、「夢にし見
ゆる」は間接的な問いかけだが、ともに相手を意識した歌
であり、そこでは「夢に見えること」は相手とのつながり
を確認するものとして機能しているといえよう。これは次
の羈旅歌の例によくあらわれている。

我妹子し我を思ふらし草枕旅の丸寝に下紐とけぬ

(12・三一四五)

我が故に妹嘆くらし風早の浦の沖辺に霧たなびけり

(15・三六一五)

みをつくし心尽くして思へかもここにももとな夢にし
見ゆる (12・三一六一)

波の上に浮き寝せし夕あど思へか心悲しく夢に見えつ
る (15・三六三九)

右には巻十二・羈旅発思と巻十五・遣新羅使人歌から、
夢とそれ以外を一首ずつあげた。はじめの二首は波線を施
したように、下紐が解けること、霧がたなびくことが、家
なる妹の思ひの現れとして、いずれも「AらしB」の形で
うたわれている。旅先でのほんのささいな現象を通じて、
遠く離れた家の妹とのつながりを確認しようとしているの
だ。「らし」と「思へか」の違いはあるが、夢の場合も妹
の思ひの現れとして受け止め、それによって妹とつながる
うとする点で、後の夢の歌と通じるだろう。

この他、集中には旅中における同様の例として、「馬のつまづき」(3・三六五・金村)、「水影」(20・四三二二・防人歌)、「春雨」(9・一六九七・人麻呂歌集)などがあげられる。このように様々な例があるということは、信仰の問題というより、歌の側の問題だったことを示唆している。つまり、旅のささいな現象を妹の思いとしてうたうことが羈旅歌の一つの型として共有されつつあったのであって、このような歌表現を通じて「羈旅」というものに形が与えられたのである。

三 古今の夢歌

古今でも万葉と共通するのは、先にも示したように恋部における夢歌の多さである。しかし、そのうたい方はずいぶん異なる。語彙のレベルでは新たに、「夢路(夢の通ひ路)」が登場し、夢そのものを客観視した「夢てふもの」も現れる。殊に「夢路」は、次のように様々な具体的イメージを付与されるのが特徴である。

恋ふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへや生ひ繁るらむ
(恋五・七六六・読人知らず)

夢路にも露や置くらむ夜もすがら通へる袖のひちて乾かぬ
(恋二・五七四・紀貫之)

また、はかなきものとして現世と夢を同一視する表現が、

死を対象にした哀傷歌の中で誕生する。

藤原敏行朝臣の身まかりける時に：

寝ても見ゆ寝でも見えけりおほかたはうつせみの世ぞ夢にはありける
(哀傷・紀友則・八三三)

この「うつつと夢」はうつつ優位から夢優位へ、両者の断絶から融合まで、王朝の和歌世界でさまざまにうたわれ、歌表現の新たな地平をひらいていく。

さて、このような状況の中で、万葉に特徴的な夢歌はどのように受け継がれるのだろうか。まず、「夢に見えこそ」のゆくえを追ってみよう。結句にこの表現をもつ類歌の多さが万葉の特徴であることを思えば、古今以降それが見られなくなるのは予想できる。実際そのとおりで、古今はもちろん三代集を探しても同じものは次の一例しかない。しかもこれが「人麻呂集」からのものであることを思えば、王朝歌人達にとってこの歌は古いタイプものとして認識されていたとおぼしい。

うつつには逢ふことかたし玉の緒の夜は絶えせず夢に見えなむ
(拾遺集・恋三・八〇九・柿本人麻呂)

それでは古今の夢歌はどのような願望表現を取るのだろうか。多くみられるのは「夢がうつつになれ」と願う表現である。

恋ひわびてうち寝るなかに行きかよふ夢のただ路はう

つつならなむ (古今集・恋二・五五八・藤原敏行)

寝られぬをしひてわが寝る春の夜の夢をうつつになす

よしもがな (後撰集・春中・七六・読み人知らず)

はじめの敏行歌(寛平御時后宮歌合)は、夢が現実になるようにとの願いをうたう。ただしそこで祈願されるのは、「恋わびてうち寝る」際にかよう「夢のただ路」という新しくイメージ化された路であつて、夢の逢瀬の喜びや激しさではない。あとの後撰集歌では、このイメージは「春の夜の夢」と、さらに美的なものに磨き上げられている。もはや万葉歌にみられたせめて夢だけでもという、相手に迫る切実さはすっかり姿を潜めている。願いの中味が美化・抽象化される結果、具体的で手ごたえのある「願望」というよりは、漠とした「願い」や「祈り」になつていくといえよう。

願望表現がこのような形を取るのには、古今の夢歌の多くが「夢にも逢えない嘆き」をうたうことが多いことと関係するのではないか。それを鮮やかに示すのが、「夢にだに」と「夢にさへ」の違いである。

現には直には逢はず夢にだに逢ふと見えこそ我が恋ふ
らくに (万葉・12・二八五〇)

うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人めをよくと見る
がわびしさ (古今・恋三・六五六)

住吉の岸に寄る波夜さへや夢の通ひ路人目よくらん

(古今・恋二・五五九)

恋ふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへや生ひ繁
るらむ (古今・恋五・七六六)

万葉の「夢にだに」は現実では逢えないことの代償として、せめて夢だけでも最小限の期待をあらわす。万葉の典型的な表現としてこの「だに」は多く用いられている。一方、古今で多用される添加の「さへ」は、現実の出逢いの絶望に加えて、夢の中までもそれが続くことをあらわす。右にあげたのはいずれもその用例である。

このように、万葉が現実で逢えないことを夢で逆転させようとするのに対し、古今では現実で逢えないことがそのまま夢で繰り返される嘆きをうたうことになる。古今の夢歌には願望表現がそもそも少ない上に、万葉のような力強さを持たないのは、このような古今の夢歌のありようと関わつてからだろう。

さてこのように見てくると、万葉に特徴的なもう一つの表現である「夢にし見ゆる」も、古今では大きく変化することが予想される。それは類句表現の減少というだけでなく、前章でみてきたように、この歌が相手とのつながりを確認しようとする歌だったからだ。古今の夢歌がつながることのない嘆きを内省的にうたうのが特徴だとすれば、か

かわりようがないのである。そして実際、「夢にし見ゆる」とうたう歌はほとんどない。そんな中で、次の歌は数少ない例である。

恋ひ死ぬとするわざならしぬばたまの夜はすがらに夢に見えつつ
(古今・恋一・五二六)

この歌は結句に「夢に見えつつ」とうたう古今唯一の例であり、これが読み人知らず歌であることは万葉との近さをうかがわせる。万葉夢歌の類型とちがうのは、「恋ひ死ぬとするわざ」として夢をとらえることであり、「夢に見えつつ」と言いさして終ることであろう。もつとも、「恋死に」と夢をうたった歌は万葉に少なくない。

夢にだに見えばこそあれかくばかり見えずしあるは恋ひて死ぬとか
(7・七四九)

家持のこの歌(坂上大嬢との贈答)は、相手が夢に見えないことをその原因とする。現れる、現れないのベクトルの向きは正反対だが、相手の思いの関係で夢がうたわれるのは共通する。このように万葉歌に近い歌もあるが、これはむしろ例外で、部分的には似ていても歌全体としては異なる場合が多い。

次に万葉と古今の違いを、類似の表現を持つ「宅守と小町」、「坂上郎女と躬恒」の歌についてみてみよう。

〈宅守と小町〉

思ひつつ寝ればかもとなぬばたまの一夜も落ちず夢にし見ゆる
(万葉・15・三七三八)

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
(古今・恋二・五五二)

茅上娘子との贈答歌に見えるこの宅守歌は、「思へかゝ夢にし見ゆる」という万葉の発想に寄りかかりつつ、毎夜毎夜夢に見えらうたうことで自らの思いの強さを伝えようとする。一方、小町歌は宅守歌と類似の表現をもちながら大きく異なる。宅守歌では傍線のように、思い寝と夢の関係が一首全体を占めていたのに対し、小町歌ではそれは上三句にとどまっている。そして下二句は上三句を包括しながら、夢と覚醒の新たな認識を示しているのである。「夢と知っていたなら覚めなかつたものを」は事実としては成り立ちそうにもない。夢の中で、夢と知っていて目を覚めさせないことなど、誰にできるだろうか。にもかかわらず、いや、だからこそ、かなわない思いの哀切な表現としてよみ手に迫る。「寝ればや」の疑問に対する「見えつらむ」の推量は、思い寝と夢の不確実な認識を示しつつ、「覚めざらましを」が導く後悔の嘆息が一首全体をおおう。ここには、万葉の夢歌になかった奥行きがある。

へ坂上郎女と躬恒

旅に去にし君しも継ぎて夢に見ゆ我が片恋の繁ければ
かも (万葉・17・三九二九)

君をのみ思ひ寝にねし夢なれば我が心から見つるなり
けり (古今・恋二・一六〇八)

はじめの坂上郎女歌は、遠く越中に離れている娘婿家持に贈られた歌である。毎夜夢に見える原因を、相手の思いではなく、自分の片恋ゆえだろうかとり返る点で万葉後期の内省的な歌の特徴を示す。もつとも、これが具体的な贈答歌として機能しているところを見ると、この歌を贈ることで自らの思いの強さを家持に訴えることになるのだろう。

後の躬恒歌も「自分の思いから見た夢」であることは共通する。しかしそこには明らかな差異がある。坂上郎女歌は「片恋の繁ければかも」と疑問を含んで詠嘆するのに対し、躬恒歌は他の誰でもない、「君をのみ」を思い寝た夢だと強く限定し、それに応じるように「我が心から見つるなりけり」と夢の因果を確信する。「くばくばなりけり」と非常にシンプルな表現をとることで、坂上郎女歌以上に覚めた認識を浮かび上がらせている。この歌が実際に贈られたものかどうかは判らない。しかし表現自体としては、もはや相手が必要とせず、孤独な自らの内面を見つめるもの

になっている。

万葉の「相聞」は古今では「恋歌」と変化するが、それは単に名称の問題ではなく、相手に訴え反応を求める性格を失わなかった万葉歌に対する、自らの嘆きを内省的にうたう新しい王朝の和歌にふさわしいものだったのだろう。

四 俗信の夢のゆくえ

ところで、古今の世界にほとんど現れない「俗信の夢」は、王朝の和歌世界から全く姿を消したのだろうか。決してそうではない。例えば、次のような例がある。

あしひきの山きへなりて遠けども心し行けば夢に見え
けり (万葉・17・三九八一・家持)

越なりける人に、つかはしける

思ひやる越の白山知らねども一夜も夢に越えぬ夜ぞなき (古今・雑下・九八〇・紀貫之)

はじめの家持歌は越中であって都の大嬢を思つてよんだ、「恋緒を述ぶる歌」の第三反歌である。そこでは遠く離れたも、心が通うから夢に見えるとうたう。通うのは家持の心か、大嬢の心か今は問わない。大切なのは、このようにうたうことにより相手とのつながりを求めようとするのだ。

一方、後の貫之歌は都にいて越なる人に、夢の中では白

山を越え毎夜あなたに出会うとうたう。「越の白山」「知らね」の同音反復や、それらのイメージの展開に古今的要素を感じさせるが、遠く離れた者同士が夢の世界で思いを通わせるのは共通する。万葉に見られた「夢にし見ゆる」のような類句表現は用いないが、万葉羈旅歌と同じ発想が王朝和歌にも受け継がれていることがわかる。どうやら、このように旅という具体的な状況で、歌をとおして相手につながるうとする時、「俗信の夢」は効果を發揮するようだ。次の伊勢物語（一一〇段）にもそれはいえる。

すべもなき片恋をすとこのころに我が死ぬべきは夢に見えきや
（12・三一一）
夢に見て衣を取り着装ふ間に妹が使ひそ先立ちにける
（12・三一二）
もつとも、二人の間に通うものが「魂」であることを明示するのは、万葉にない王朝和歌の認識を示す。それはそれとして興味ある問題だが、今はそれには触れない。大切なことは具体的な男女の贈答歌の中で万葉歌の発想が受け継がれていることだ。

むかし、をとこ、みそかに通ふ女ありけり。それがもとより、「こよひ夢になん見え給ひつる」と

このような例は私家集にも見られるほか、勅撰集の中でも襲の歌を集めたとされる後撰集にも少なくない。

いへりければ、をとこ、

消息かよはしける女、をろかなる様に見えはべりければ

思ひあまり出でにし魂のあるならん夜ふかく見えば魂むすびせよ

恋ひて寝る夢路に通ふ魂のなるかひなくうとき君かな

傍線のように、ここでは女が「あなたの姿が夢に現れました」と男に文をやる。さしずめ万葉なら「夢にし見ゆる」とうたうところだろう。これに対して男の歌は、それはお前を思う私の魂が抜け出たものだろうよ、夜更けならそのまま留まるように魂結びして欲しいと答える。訪れを期待した女としてはうまくはぐらかされたわけだが、夢の謎を解いて見せた返歌はなかなか巧みである。それは次にあげた万葉の夢歌贈答にも通じる。

大江千里、まかりかよひける女を思ひかれがたになりて、「遠き所にまかりにたり」と言はせて、
久しうまからずなりにけり。この女、思ひわびて寝たる夜の夢に、まうで来たりと見えければ、うたがひにつかはしける
はかなかる夢のしるしにはかられてうつつに負くる身

とやなりなむ

かくてつかはしたりければ、千里見侍で、なをざりに「まことに一昨日なん帰りまうで来しかど、心地の悩ましくてなんありつる」とばかり、言ひ送りに待りければ、重ねてつかはしける

思ひ寝の夢と言ひてもやみなましなかなか何にありと知りけむ (恋四・八七一〜八七二・読人知らず)

はじめの読み人知らず歌では、冷たい態度の女に対して「うとき君」とぐちをこぼすが、そこで持ち出されるのが「夢路に通ふ(我が)魂」である。先の伊勢物語と同様の発想から出ていることは明らかだろう。

後にあげた大江千里と女の贈答はもう少し複雑だ。傍線部に示したように、女は夢の中で千里の訪問をうける。遠くへ行ったというのに夢に訪れてくれるのは、私を恋しく思っていてくれるのかと期待しつつ「はかなかる」の歌を女は贈る。現実には私から離れるつもりだろうに、はかない夢に期待する私だと嘆くのである。

歌を受け取った千里は、「実は一昨日帰ったのですが気分が悪かったの」と下手なうそをつく。女は、いつそ「その夢はあなたを思つて寝たからの夢でした」と答えて欲しかった、なまじ嘘と知つたばかりによけいつらいと返す。どうも千里は完全にやりこめられている。ここでも、

お互いの思いのゆえに夢に現れるという発想が息づいていくことがわかる。

このように「俗信の夢」の発想は、魂が行き通うという表現をとりながら王朝文学のそこかしこに見られる。源氏の六条御息所もその一つの例——愛と嫉妬を比類のないドラマとして結晶させた——に過ぎないのだろう。男女の贈答という襲の歌の世界においても同じだということは、万葉の発想がここで復活したというのではなく、古代の人々の意識に一貫して流れていたと考えるべきだろう。物語や日記はそれぞれの主題に見合った形で、新たな意匠をくわえて夢を取り込んでいったのである。

このようにみえてくると、夢歌における呪性の衰退を夢信仰の衰退としてとらえるべきでないことは明らかだろう。より大きな要因として、古今集に代表される王朝の暗の恋歌が、相手に向う直接的な表現から、自己を見つめた内省的な表現へと変化したことがあるの⁽¹⁹⁾だろう。ここでは夢は通い路という新しいイメージを付与され、また「うつつ」を照らすことでその意味を問い直すことに重点が置かれる。見てきたように、男女の襲の歌に「俗信の夢」は生き残る。しかしついには、それが王朝和歌の主流になることはなかった。むしろ「春の夜の夢」に代表される耽美的・幻想的な夢の形象こそが中世の世界に受け継がれる。こうして、

歌表現の自律的な展開が新たな世界を切り開いていったといえよう。

夢歌における漢籍の影響のような全体的なものから、初期挽歌の特殊な夢のありよう、家持歌の夢歌の特殊な性格、小町の夢歌など個別の作品まで、論じるべきことはまだまだ多い。今後は具体的な作品をとおして、これらの問題を考えてみたい。

注

(1) 中村文「反転する夢・断絶する夢―平安末期私家集に見る〈夢〉の意識―」(『日本文学』48巻7号、一九九〇・七)は、平安末のさまざまな夢の歌を追いながら、夢はことがらを隠喩・象徴として語るための装置であり、中世に氾濫する夢の言説を、そのままに信じたかどうかを性急に判断してはならないという。本稿の問題意識と通じるものとして興味深かった。

(2) 例えば、河東論では万葉から王朝和歌への夢歌の変化を、夢信仰の希薄化としてとらえる。具体的には池見澄隆「〈夢〉信仰の軌跡」(『増補改訂版 中世の精神世界 死と救済』人文書院、97、初出83)を引いて、夢信仰の「風化・滅圧」と呼び、その要因は「夢の世観」にあるとする。しかし、信仰の風化というだけでは同じ平安朝に、日記・説話・物語にそれほど多彩な夢が描かれることをどう説明するのだろうか。散文においては、夢信仰が

花開くのは平安朝なのだ。

また河東論では古今集以下の王朝和歌を、夢信仰の風化ととらえて、平安から鎌倉への接点におく。和歌では夢信仰が薄れているとの判断があるからだろうが、古今集が十世紀初頭、王朝文学の劈頭にくることえば、この位置付けにはやはり無理があろう。

(3) 小町谷照彦「いめ」(『万葉の歌ことば辞典』有斐閣、一九八二)、鹿内和子「和歌における夢について―万葉集と八代集―」(『女子大国文』63号、一九七二)などが、次のようにまとめている。

【万葉】 大多数の用例は夢での出逢いを詠んだものであり、当時は相手のことを深く思っていると、当人の心が身から抜け出して相手の夢の中に現れるという俗信があった。夢は現実と連続する。

【古今】 観念的な夢の世界に憧憬し、沈溺する傾向がある。代表的なものとして、美化されイメージ化される「夢の通ひ路」や、夢のはかなさをこの世に重ねる発想が指摘される。

【新古今】 はかないはずの夢をわが命の拠り所とする傾向がある。寝覚めの抒情、「春の夜の夢」に耽美的なものをみる。

(4) 多田一臣「魂と心と物の怪と―古代文学の一面―」(『美夫君志』64号、二〇〇二・四)は万葉・靈異記などから源氏まで、夢を含め遊離する魂のありようとして大きくとらえる。見通しとして共感できるが、私としては

それぞれの作品にとつての夢の問題にもう少しこだわりたいと考える。

- (5) この久富木原論は夢歌の展開のなかで、万葉と古今をつなぐものとして小町歌を位置づけようとする点、共感できる。ただし、「うけひ」などの万葉の呪性と古今の臨場性、双方向的な万葉の夢と一方向的な古今の夢など、それら現象をどのようなものとしておさえるかが異なる。
- (6) 吉井巖〔万葉集全注 卷十五〕有斐閣、一九八八)が、万葉の夢の多様なあらわれについて、次のように述べるのも通じるものがある。

以上のような恋情表現における夢の歌をたどって行く
と、作者たちは、夢が持つ信仰に支えられて作歌しているのではなく、むしろ恋情表現の手段、技巧として、夢を利用し表現している様相がうかがえるのである。

(二六三九番歌【考】)

- (7) これについては拙論「天平相聞歌の表現と展開―夢とその俗信をめぐる―」(『美夫君志会編』『万葉史を問う』新典社、一九九九)を参照していただきたい。

- (8) 岡部政裕氏「夢に見ゆ」考(『上代文学』38号、一九七二・一一)などがある。

- (9) 私見では、「夢に見えこそ」は卷四・1、卷五・2、卷十一・5、卷十二・11、卷十三・4の合計23例。「夢にし見ゆる」は卷四・8、卷七・3、卷十一・4、卷十二・4、卷十五・3、卷十七・3、卷二・八・九・十に各1の合計29例が数えられる。

- (10) 拙論「万葉相聞表現としての「夢」―「俗信の夢」と「自分ゆえの夢」(『美夫君志』61号、二〇〇〇・一一)参照していただきたい。

- (11) 下紐がとけること、霧が立つこと(春雨・馬のつまずき等も)が根拠のある推定「らし」で相手の思いと結ばれるのに対し、夢の場合はそうでないことを思えば、そこに何らかの区別がなされていることがわかる。ただし、夢の場合も「らし」で結ばれる例(相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えずうけひて寝れど(11・二五八九))があること、「夢の俗信」を背景にした多くの歌がある(霧・春雨などにはない)ことからすれば、夢が下紐や霧より不確実だったというわけではないだろう。むしろ、下紐や霧のような即物的な把握とは異なる意識が夢にあったとみるべきだろう。

- (12) 夢に現れるように訴える歌として、古今集に例外的に現れるのは次の小町歌である。

限りなき思ひのままに夜も来む夢路をさへに人はと
がめじ(恋三・小野小町・六五七)

小町と夢については注4にも述べたように万葉から古今への夢歌の展開をとおしてあらためて考えてみたい。

- (13) かつて、これについて和辻哲郎(『万葉集の歌と古今集の歌との相違について』『日本精神史研究』岩波、一九二六)が、小町の夢歌を引きながら次のように述べたことがある。古いものではあるが、示唆的である。

これは恋の歌であるには相違ない。しかし直接に恋

しさをではなく、ただ恋における夢を詠嘆するに過ぎぬ。夢を頼む恋人の心理、夢さえも人目をはばかるのを見る不自由な恋の心理、それらが主たる関心事であって、恋そのものはただ「はかない恋がある」という以上に現されていない。「夢にでも見たい！」という哀求と、「夢を頼みにしている」という叙述とは、力がまるで違う。

かくて古今の恋の歌は、恋の感情を鋭く捕えて歌うよりも、恋の周囲のさまざまな情調を重んずることになる。

…また彼らは「夢」ということはできても、「夢てふものは」と言うことはできぬ。…ここに言葉の使用法における新しい境地が開ける。万葉の歌人たちにおいて単に具象的な、限定された意味をのみ持っていた言葉が、ここでは連想によって、広い、さまざまな意味と情緒とを指示する言葉に押し広げられる。

(14) 例えば、和泉式部統集(二一三)には男の代作として彼女が作った次の歌がある。

をとこの、はじめて人のもとにつかはし侍りしに、かはりて

おほめくなたれとはなくてよひよひに夢に見えけむ
我ぞその人

(15) 伊藤博『万葉相聞歌の世界』(塙書房、一九五九)が相手の呼称に関して、古今歌と物語の和歌ではことなる

ことを次のように指摘しているのともつながらだろう。

かように、蜻蛉、源氏以下、日記、物語文学の歌における相手を呼ぶコトバが、古今集の和歌の傾向とは逆で、むしろ万葉相聞歌と等質的な現象を呈するということは、その歌の多くが、相手に直接呼びかけて、実際に贈答されたところから来た必然の結果であろう。(二八ページ)

〔付記〕本稿は二〇〇三年度上代文学会(北海道大学)の発表にもとづく。席上、またメールで有益なご意見をいただいた方々に、心から感謝申し上げます。十分には生かせなかつたものも多いが、今後の糧としたい。